

結婚の礼賛・多様性の礼賛

ヨハネによる福音書 2 : 1 - 10

02:01 三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。02:02 イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。02:03 ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。02:04 イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」02:05 しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。02:06 そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあつた。いずれも二ないし三メートル入りのものである。02:07 イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。02:08 イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。02:09 世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった。02:10 言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわった所に劣つたものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」

結婚式はキリスト教が大切にしている儀式のひとつです。ところがイエス・キリスト自身は結婚についてほとんど何も語っていません。イエスの弟子たちは、結婚はこうあるべきだということをいろいろ語っているのですが、イエス自身は、結婚のあり方について教訓じみた言葉は何一つ残していません。

むしろ言葉ではなくひとつの行為が印象的な出来事として伝えられています。カナという田舎町で結婚式に列席したときのこと、祝宴のぶどう酒が足りなくなって新郎新婦が慌てていたとき、招待客に分らないようにこっそりと、水をぶどう酒に変える奇跡を行つて、若い夫婦を助けたと言う話です。奴隷たちだけがこのことを分かつていて、語り伝えました。

実際に奇跡が起こったのかどうか、ぶどう酒をもたらすためにどんな努力をしたのかはわかりません。けれども大切なことは、キリストが偉そうな説教をしたのではなく、隠れたところで二人のピンチを救つたということです。

それからもうひとつ。このとき、イエスが一肌脱いで力を貸したとき、そのことは彼の行動予定にはなかつたことだということです。はしめイエスは、母マリヤが「ぶどう酒が足りなくなりました」と耳打ち

したとき、「わたしには関係ない」と、自分の責任の範囲を明確にする発言をしました。けれども母の強引さに押されて、力を貸すことになったのです。

結婚の教訓を何一つ語らなかつたイエスですが、一つだけ結婚について言及したことがあります。それは離婚についてです(マタイ5:32, 19:3-12)。こうした箇所では当時の結婚制度で不利な立場におかれていた女性や、社会から偏見の目で見られていた独身者、障害者ら、を擁護する発言が見られます。それは、聖書の他のところで、イエスが寡婦に対する搾取に憤り、極貧状態でも献金(現代の「納税」)する寡婦への優しい心遣いを示した箇所と符合します。

以上まとめると、イエスの結婚についての態度から3つのことが浮かび上がってきます。1. キリストは偉そうなことは一言も語らず、見えないところで二人を助けた。2. 人生は計画ではなく、想定外の出会いだということ。3. 結婚の破綻を、破綻ではなく多様性として受け入れているということ。

幸せの形というものはありません。人それぞれに皆違います。どうすれば幸せになれるか? その答えは、誰もが苦しんで見つけていかなければなりません。だからイエスは何も教えなかつた。幸せの方程式なんてないのです。人生は、設計図があつてその通りに作れば間違いなく規格品となるような工業製品ではありません。むしろ芸術作品です。画家は、世間に評価されないと分かつていても、貧乏のどん底でも、どんなに苦しんでも、身を削り、命を削って、懇親の力を込めて、一枚の絵を描きます。それはその人だけが作れるものです。結婚する二人の幸せも同じ。離婚する人の幸せも同じ。寡婦の幸せも同じです。それは「その人達だけが作る、その人達だけの幸せ」なのであつて、誰かが設計図を与えることができるものではありません。

人生設計という言葉があります。いかにもまことしやかですが、注意が必要な言葉です。ここにいらつしやる方で、わが人生、設計どおりだという方はいらつしやいますか。ある程度の見通しは必要であつても、人生は設計できるものではありません。出会いこそが素晴らしいのです。わたしたちの人生には色々なことが起こります。事実は小説より奇なり。予想外のこと、思いもよらないこと…。自分の人生にこんなことが起こるとは思わなかつた…。その一つひとつに誠実に向き合つて行くほかないのです。世間並みの幸せを望めば、皆不幸のどん底としてしか見えないようなこと…。その中に真の幸せがあります。それはその人だけのオリジナルな幸せの形なのです。神様はこの幸せをわたしたちに与えようとしておられるのです。

教会は、お互いがオリジナルな幸せを追求している仲間です。自分を不幸だと思つていた人々が、自分だけのオリジナルな幸せを追求し始める。そのような方向転換、これが回心です。それを促すのが教会の勤め(伝道)です。そんな仲間を増やしていきませんか。「多様性の豊かさ」。豊かな多様性あふれる西仙台教会にしていきたいと思つています。